新約P.292 ローマの信徒への手紙12章15節

「喜ぶ人とともに喜び，泣く人とともに泣きなさい。」

証

T.O

　尚絅学院にとって，礼拝とは呼吸である。どこかでそんなことを聞きました。私の高校生活を振り返ってみると，礼拝がいつも守られていたことに気づかされます。朝の礼拝は，教会の先生だけでなく，尚絅の先生方も説教してくださり，身近な先生方のお話は，心の中にすっと入ってくるものがあります。学校が再開し，礼拝堂で礼拝を受けていると，どこか落ち着く自分に気づかされました。

そんな尚絅学院の礼拝の中で，私は「他者と共に生きる」という言葉がひときわ強調されることに気付きました。普段は，他者とどのように生きればよいのだろうかとぼんやり考え，結局答えが出ずに忘れてしまう日々が続いていました。しかし昨年，豪雨災害のボランティアで宮城県丸森町を訪れたときのことです。ボランティアセンターには，東北地方だけでなく，関西，中国地方などのナンバープレートを付けた車がたくさん見られました。現地では，ボランティアの要請を受け付ける人，被害状況を記録する人，ボランティアの派遣先や人数を決める人，必要な物資の運搬を指示する人など，多くの人が一生懸命にそれぞれの役割を果たしており，私は一つの地域の災害にこれだけ多くの人が関わっていることに圧倒されました。このボランティアの力があるから，被災した方々は失ったものがあっても，生活を取り戻そうと前を向けるのだと感じました。

このとき，「他者とともに生きる」ことについて初めて真剣に考えました。ボランティアとは，ただ単に「与える―与えられる」だけの関係だと思っていました。しかし，参加者が被災者と同じ視点に立って見ることで，新たな視点で物事を捉え，さらに似たような環境にある人のことを思うようになりました。先日の熊本県の豪雨でも，いままさに同じようなことが起こっているのではないか，何か私達にできることはないのかと考えさせられます。私はこの新たな視点を，ボランティアと聖書の学びの中で与えられていたのです。

「他者と共に生きる」とは，収穫感謝礼拝や花の日礼拝で高齢者や障害を持つ人へ関心を向けるように，クリスマス礼拝などでホームレスの人を思うように，「普段意識しない人へも思いやり，必要な時に助けになりなさい」という意味の言葉だと思います。余裕がないと，このような考え方は疎かになりがちですが，朝の礼拝は心を落ち着かせ，他者に思いを向ける時間でもあります。現在コロナ禍にあって，私たち受験生は戸惑うことが多いです。しかし目の前のことばかりでなく，自分の取り巻く状況から一歩引いた視点で社会に目を向けると，どうしようもなく困り，路頭に迷う人がいます。そのような人のことを思い，私たちにできることは小さなことかもしれません。しかし，支援物資や献金，折り鶴など，他者へ思いを馳せるきっかけが礼拝にはたくさんあります。他者に向けたその小さなことを積み重ね，日々他者の存在を思い，助けとなることができるよう，礼拝を守り，「他者とともに」生きていきたいと思います。